
異世界への扉

ヒルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への扉

【Nコード】

N9896I

【作者名】

ヒルト

【あらすじ】

□ 過激になつていくイジメから逃れる為、死ぬ事を選んだ僕。だけど、その途中で得体の知れない”ナニか”に襲われて、逃げたその先で見つけた”モノ”。それによって僕は全く違う世界に入り込み…そして、その”ヒト”達と出逢った…うん、出逢ったんだけど…ね。□□□□□□□□□□えと…あ、あのね？みんな、な何でそんな、その…何か怖いくらい、熱っぽい視線を僕に向けてくるんですかああ？！ あっダメですってヴあつ、あ、やつ、やあつ、わ、わっうわああーっ！！（涙目

樹海は異世界への入り口（前書き）

えー、完全オリジナルです！

一応、全年齢対象なんですけど…時折にR15〜R18が混じった
ります。

その時は注意書きを書きますので、対象外の読者様はスルーでお
願いしますねー。

では、どぞー。

樹海は異世界への入り口

何で今だと思ったのか、理由は自分でも判らない。ただ、気付いたら僕は皆から離れていき、遊歩道から外れ、樹海の中へと歩を進めていた。

「はあ…はあ…っ」

まともな道なんて…ううん、道自体が無い中を僕は奥へと進んだ。本能で彷徨く獣ですら道らしい道を付けられない、木の根や大小の岩でうねった大地を宛てもなく僕はただひたすらに奥へ奥へと…死ぬ為に。

多分、林間学校の内容に奉仕活動の一環で樹海への中の遊歩道を清掃目的で歩くという項目を見た瞬間から僕の中で覚悟が決まったのかも…あ、今する理由あったなあ。

動機は…僕への過度のイジメに自分の心が堪えられなくなってきたのと、命の危険を感じたから。

イジメを受け始めたのが、今年の中学二年に進級した辺りなのは覚えてる…でも、原因は何だったのかはもう思い出せない。

認識のズレ、濡れ衣と訳も分からずにとばちりを食らったぐらいみたいな内容しか覚えてない。

とばちりからエスカレートしていく行為は何時しか物理的な攻撃に変わり、究めつけは…ついさっき。

集団行動で樹海へと向かう途中、赤信号で立ち止まった僕を後ろから押された。

正直、呆れた。

かなりの交通量がある主要幹線道路の歩道で待っていた僕は急に後ろから押されて案の定、轢かれそうになり、茫然と眼前に止まってくれた車を見つめながら押した張本人であるうイジメてくる人達達の厭な笑みを見させされた。

嗚呼、僕はもう此処に居れないんだな…と確信した。

学校に僕の居場所はない。

学校に居たらイジメられて殺される…もしかしたら”学校”という限られた空間だけに留まらなくなるかもしれない。
味方は居ない…いや、出来ない。

人が、怖い。

だって、それすらも向こうの気分次第で決まる。

敵かもしれない、味方だとしても結果的には無くならず更にエスカレートしてしまう切欠になる敵かもしれない。

「…」

もう、そんなの充分だよ。

ここまで来て、まだ覚悟を決め損ねたら僕は相手を恨みも出来ずに殺されてしまうかもしれない。だから、

僕はここで死ぬんだ。

死ぬ覚悟を決め、今までの恨みを辛みを溜め込む…死んだ後に僕をイジメた奴らを呪い殺す為に。

「…ふう…っ」

足を止めて、一息着く。

軽く立ち眩み、膝に手を着くと腕時計の時刻がぼんやりと見えた。抜け出してから時間にして、約40分…運痴で体力も無いはずの僕が休憩も無しにこうも歩けたのには我ながら少し吃驚。

身体が小さい上にあんまり丈夫じゃなく、家に籠もりがちで内向的な僕でも必死になったらこんな畦地でもこんなに歩けるんだなんて知らなかったよ。

「…」

それにしても、何か…

「空気がザラついてて気持ち悪い、かな…？」

今更になって周囲を見渡す余裕が出来た僕は気付けば辺りを見回していた。

晴れた空だから陽光が出てる筈なのに鬱蒼とした木々や茂みが光を奪ってて、景色は何処か薄暗くて曇っていて、地面からは土を盛り返して剥き出しになった根がその足を曲げくねらせて自然のトラップと化している。そして、

「…っ！」

喉が

「…っんく」

鳴る。

視線の先、木の枝にぶら下げられた”その目的”によって”使用された縄”とかが視界に入った。

その”妙に草が腐っている地面”などは丁度、大の大人がすつぽりと横たわったぐらいの空間が出来ており、それは、

人の死がそこにあつたと言うこと。

今、僕の目の前に、目と鼻のさ…きつ！？

「…なつ何、今のっ？」

突然に視線を感じ、それを感じた辺りを見るが誰も居ない。

誰も居ない…居ないのに、ただ、”見えない何か”がそこかしこから”僕を見ている”のが分かる。

ぼくはそんなの知らない、わかるはずがないのになぜか、

「…っ、…っひ」

わかった…”そこかしこにいるって”。

怖い。

本能がそう叫んだ。

全身が騒つく鳥肌が立つ冷や汗が止まらない頭痛がする喉が渴いて張り付いて唾が飲み込めない”何も無いはず”なのに一際に”感じる場所”から視線が外れない足が動かない身体が動かない動いてくれない…向こうは動いてる気はあるのにうごいてよぼくのあしっ！

あれからどれだけ走ったのかは判らない。

只、判るのは奥へ奥へ、奥深い最奥へと逃げたイヤ、追い込まれているのかもしれない…けど、別にそれはいい。

帰れなくていい。死ぬって覚悟したんだから、覚悟っあ！

「つぐあつ?!　っ…たっ、つい…痛っ…っ!　……………?」

剥き出た根に足を取られたせいで僕は走りの勢いそのままに思いっ切りコケて、転がって何かにぶつかり、そのまま仰向けで倒れた所をすぐに立ち上がって周りを見渡した。が、あれだけ僕を追い立てた気配が今はない…一向に、来ない

「ふ…振り、切った…の?」

思わず口をついたあと、押し寄せてきた感情は

安堵だった。

これから死のうという人間が安堵するなんて変に思つかもしれないけど、こんなの冗談じゃない。

僕は静かに死にたい…だから、存在が何であつても誰かに、何かの手によつて死ぬのはお門違いなんだっ。

「…けっ、構っ、お、奥にき、来たっのかなっ?」

時計を見る余裕が出来て見やってみると、あれから更に30分経つてた。

30分。その間をぶっ通しで走っていたらしい…人間追い込まれると凄いなだね、初めて知ったよ。

「…これがつ、毎日出来っ…てたらっ、違ったのかな」

少なくとも何か、現在が一つは変わったかも…？

「…はっ、ははっ…何が、変わっただ」

今更、なんだよ…そんなのっ。

僕は自嘲すると後ろを振り返って樹海の奥であろう先を見つめる。
とりあえず思ったのは、

このままでは静かに死ねない…という事。

さっきのアレがいつ来るかも解らない…なら、動ける内は動いて
動けなくなった所で死のう。そこまで来て、もしもまだ”あれ”が
追って来たならその時はもう、諦めよう。

その時には逃げる気力も逃げようなんて考えも起きないだろうか
ら。

「…よし」

そして、僕は歩いた。時折、小走りになって奥へと進んだ。

日も暮れて何もかもが闇で見えにくくなり始め、更に注意力は割
かれていき、体力的にも精神的にも底を尽き始めた頃に

「？」

”何か”を

「…え？」

見つけた。

「ひ、かり？ え…何の？」

視界の隅に捉えたのは、蒼い光。

「え、まさか…人っ？」

いや、

「…違う？」

あれは…発光ダイオードみたいな、単調な人工の光じゃない。

濃淡の波があるのか、光量が全く安定していないソレは光明の大半を生い茂る茂みや木々に阻まれてはいたが、この暗闇で気付くには充分なモノだった…けど、

「…か、関係ないよ」

そう、関係ない。

僕は死ぬんだからそんな事に興味なんか…と、その光から離れる方向に足先を向けようとして、

「……………、はああ」

足が動かなかった…あの光に興味を抱いてしまった。

好奇心は猫を殺す…なんて恐ろしい格言もあるのに、その光は僕の興味を死よりも更に惹かせてしまった。

「正体だけでも見て…この世の見納めにでもすればいいかな、うん」

なんて、わざわざ声に出してしまうのが何だか情けない。けど、光へと足を向けると根を張ったかのように動かなかった足が嘘のように動くのはちょっとだけ嬉しかったりする。

僕は内心でその事に苦笑すると、謎の光の元へと向かった。

「……うわあ…」

大体、20分ほどして光の源に着いたんだけど…そこにあつたのは一種異様な風景だった。

拓けてもいない、狭々しい平らな地面に立ち聳えている大きな蒼い扉…まるで某有名メーカーのシリーズ物ゲームの中に出てる、扉のオブジェクトを思わせる雰囲気それは漂わせている。

相違点として、あちらは片開きっぽくて背の高さぐらいしか無い感じだけど、僕の目の前にあるコレは両開きで優にそこら辺りにある大木並みにデカかった。

「ホント…扉だけ、だね」

眺め回してみると本当に、只単に扉が一枚あるだけ。

かなりシユールだ。

見てる内、妙な期待感を抱いた僕は扉の正面に立つと二つのドアノブを見やった。

これだけのデカイ扉のくせにノブの位置は普通の高さにあり、そこには鍵のようなモノは無く、見るからにこの扉は普通に開けれそうだった…これは、

「うん…悔いになりそうだなあ。よし、開けちゃお！」

そう誰にとりも無く呟き、僕はドアノブを掴み…ん？

「…あれ…？ 今、何か…」

暖かかったような？

二つのドアノブを握った瞬間、何故か暖かった。しかも、その暖かさが両方の手を通して僕の中へと染み込んでいったような気がした。

身体が…芯みたいな辺りがぼんやりとあつたかいけど何だろう？

「いや、どうでもいつか。早くしないとまたあの気配が来るかもしれないし」

僕はそう結論付けると両の扉を思い切って引いた。そして見えた扉の景色は、

「まあ…そうだよ、ね」

さっき来た方向の景色だった。

変に期待していた自分が、馬鹿みたいに思えてきた…は、ははっ。

「何、期待してたのつか、なあ…僕はっ」

僕は馬鹿馬鹿しく思い、俯きながら扉を潜るとソツと袖で目を拭いた。

潜った所で何も変わらない、樹海の中。

何処か誰も知らない処へ行けるかもしれない。

と、そんな事を勝手に夢想してた。

誰も知らない、そんな土地、世界に通じてるかもしれないと。

「あは、はっ…バカだ…だからっ、イジメられるんだっ！」

驚く程、落胆してしまっている自分に辟易した。

この扉の存在が有り得ないからって変に期待なんかするなっこの世界に非現実的なモノを求めてもそんなもの何処にも在りはしない！見えるものだけが現実っこの扉はただ存在しているだけ、そういう現実なんだから…ああ、もういいや。

「疲れちゃった…何かの縁だし、これに凭れて衰弱死もい……………え、何これ？」

振り向いてそれを見た瞬間、もう扉を閉めてそのまま凭れて死のうと考えていた意識が一気に消し飛んだ。

あった。目の前に在った、

違う世界の風景が。

”押し開けられた”扉の中に今、居る樹海とは異なる景色…それは何処かの森の中の拓けた場所に通じている様に見えた。

僕は思わず自分の頬を摘み、思いつ切り捻ってみ、あアイタタッ！？

「ゆ、夢じゃない？ 夢じゃないっ！ う、嘘…でしょ？」

精神的に極限状態だから来る幻影というわけでもない。

扉はちゃんとここに存在する。だから、この景色は本物…それが、

現れた。でも、さつき”引き”開けた時にはそんな…？

「え…もしかして元々、押し戸だったとか？」

でも、呟いてみて実際、そうなのかもしれないと思った。

反対側から開ければ”今、居る部屋”が見えるのは当たり前だ。なら、ちゃんと正しい位置から見れば、”隣の部屋”が見える。

「…でも」

この扉の先は一体、何処に繋

「つかは！？」

息が詰まった。

突如として激痛を伴って現れた首への圧迫感…誰かが僕の後ろから首を、締…め…

「っ、っあ、あ・あ・あ・あ・あ・あ・っ！！」

僕は我武者羅に腕…肘を思いつ切りに後ろへと放ち、足も後ろ…脛に向かって踵を振り下ろしたっ。

「っぐ?! っく、かはっ」

手応えを感じると共に首の圧迫感が弱まり、一気に首と身体を捻って強引に引き剥がして慌てて離れる。

あまりの不意打ちだった為、足りなかった酸素を無理矢理に取り込んで軽く噎せ、噎せた拍子に掴まれた箇所からの痛みに嗚咽が漏れる。

そして、

「つ…な、何…っひ？」

明らかな殺意で以て首を絞めてきた相手を見るために振り向いて、僕はその相手の姿を見て思わず悲鳴を上げた。

[illegible]

人…違うっ。

それは人間なんかじゃない、人型としか形容出来ない姿……それは身体中を無数の他人の手で覆い尽くされ、外に向かつて漂わせてる……そんな恐ましい姿だった。

胴体や四肢、顔、果てには髪の毛まで手に取って代わり夥しいまでに生えている……赤ん坊のような小さい手、子供のような手少年のような手少女のような手。成人、壮年、老人と老若男女の手がその生き物を形作っていた。

⌈
:
:
/
:
:
/
:
:
/
:
:
⌋

「つひ…」

手の化け物が一步、また一步と僕の方へと詰め寄つて来……来
るな！

「こ、来ないでよ……あっち、行けよおおっ！」

地面を這って後退り、指が何かに触れ、それを…石を思いつ切り投げた。

投げた石はそのまま顔らしき所にまともに当たる。が、投げた石もかなりデカくて血を吹き出す程の傷が出来たのというのに一瞬だけ動きが止まっただけで一向に怯みもせず、また一步さらに一步と化け物が詰め寄ってくる。

「ひっ…っ、いつ、いやっ、いつ、う、うわああああああっっ
！……！」

僕は辺りに散乱していた石を手当たり次第に拾っては化け物に向かって力一杯に投げ放ち、投げに投げて投げまくった。

「っ、っああ！」

投げながら立ち上がった僕は両手でも、普段なら持ち上がりそうにもない程の岩を持ち上げ、化け物に投げた。

その岩は投げた後になって僕の予想以上に重くデカいと思った瞬間、

「…、…、…っ」

岩の重さと勢いのお蔭か、食らった化け物が僅かに怯んだ！

「っああああああああっ！」

僕は踵を返すと無我夢中で扉の景色に向かって駆け出した。

身体と勢いが噛み合わず、何度もコケそうになりながらも僕は扉を潜り抜けた。

「……、っ！」

全く違う此方側の雰囲気を感じるのも程々に僕は扉の片方に手を掛けると思いつ切り後ろに向かって閉めると鈍い音が響いた！

…っはあああああつ！

「閉っ、まつ、れええつつ！！！」

振り向き様に閉め損ねたその扉に向かって蹴りを放つと予想通りに化け物の半身が見え、同時に片方はこの蹴りで完全に閉まるっ！あと一枚

「っ、あつ！？」

残りの一枚に手を掛け、いざ閉めようとした所で割り込む様に化け物が僕の足首を掴んできた。

「っ痛、痛いっ離してっ！ 離しっ離せよっ、離せっ！！！」

15年生きてきて初めて、相手に命令し、語気を強く捲くし立てた。

残りの一枚の扉を力任せに何度も何度も足首を掴む腕に叩き込む。そして、あまり隙間を開けすぎると身体を割り込ませてくると判ったので、ひたすらに肩と身体で扉を押し込んだ。

その攻防の間も化け物は物凄い握力で以て足首を圧し、そこから激痛が走る。

ミシミシと骨が軋む音が聞こえてきて

「っ、っ、っあ、あつ、あ・あ・あ、あああああつ！！！」

痛みで意識が朦朧とする中、僕は生まれて初めてキレた。

「っ 離せ、離せ化け物野郎がっ！」

足首を掴む手…とは別にその化け物の腕に纏わりついていた人間の手の指二本を掴むと思いつ切り、関節とは逆に折り畳んだ。そして、直接握る手に思いつ切り爪を立てて皮膚という肉を破りまくった。

その時の僕はもう死ぬことなんか考えられなくなって、ただ目の前の存在から生き延びる事だけを考えてた。

「っ、っこの…何でっ」

相手の皮膚を突き破り、肉を千切り取って中から無数の指の骨で作られたモノが筋肉から見えているのに握力は未だに衰えず、尚も僕の足首を軋ませる…このままじゃ、折れるっ。な、何かっ何か無いのっ?!

「あっ、く……………んああっ！」

すぐ手の届く範囲に見つけた拳大の岩を見つけ、扉が開かないように四苦八苦しながら何とか手に取ると、

「っい！　っ、く…う、痛、わあああっ！」

それを力一杯に掴む手に向かって振り下ろした。

力一杯に、何度も、何度も振り下ろす。力み過ぎて上手く手だけに当てられず、自分の足にも当たって激痛が走る。だけど、背に腹は変えられない！

僕は頭や肩、その身で扉を押しつつ、痛みを堪える為に岩を持たない自分の手に噛み付き、ただひたすらに足首を掴む相手の手に岩を振り下ろし続けた。

何度も何度も力一杯に岩を振り下ろす。

白っぽかった岩が赤く染まってく中、掴む手から吹き出す鮮血とそれの巻き添えにどんどんボロボロに、傷だらけになっていく僕の足…もう、殆ど痛みも感じなくなっていた。

「っ！　っ、っ！！」

痛みを堪える為、悲鳴を上げない為に噛み付いている自分の手からはもう皮膚を食い破り、肉に食い込んだのか、血の味が始めている。

両の手と足の片割れがどんどんボロボロに成っていく…相手の手も手首も骨がぐちゃぐちゃなのにまだ離さない。

もう骨だけで掴んでいるようなもののに何で放さないのっ！？

「…っ、うつーっぐ、っいい！！！」

叩くのを止めた僕は発想を変えた。

叩き過ぎて欠けて割れた岩、その中で尖っている所を探しだすとぐちゃぐちゃになっている辺りに突き刺し、押し当てて擦り漕そぎ、肉を押し斬る事にした。

伝わってくる肉を斬る感触、骨を削る振動。

僕は瞼を閉じ、早く斬れるのを願った。この恐怖から解放される様に何度も願った…願いつつ、これがいつ終わるのか終わらないのかも心折れかけた時、

「…、…っ、？　っうわ」

扉は唐突にして閉まった。

バランスを崩した僕はそのまま、”前のめりに地面に倒れる”。

「は、はっ？ は、っ…はあっ…っ」

首を巡らして辺りを見回すけど何もない。

あんなに大きかった扉はあの、閉まりきった瞬間に立ち消えていた…今までの攻防が嘘みたいに静まりかえっていた。

「つく、い、痛…い…痛…いたい、よお…」

僕の片足は、化け物の手から解放された代償に足の甲や足首・脛は岩の打撃でズタズタになり、ズボンの破れ目から見える打撲の鬱血で変色、裂傷で大量の血が流れている。

痛みを堪えるのに噛んだ手や腕も袖の布地ごと歯が食い破って其処からも出血している。そして、岩を握っていた手も何度も打ち付けていた反動か、爪が割れ、指も折れているのか、動かしただけでそこからも激痛が走った。

もう、満身創痍だった。

傷からは温かい血がどんどん流れていて、僕の身体からどんどん温かさを失わせていく。

「死、ぬ…死ぬ…ん、だ？ ぼ、く…僕は…こ、こで」

死。

この何処かも判らない森の中で僕は死ぬ。それを改めて実感し、僕は…

「死…に…たく、ないっ」

死にたくないと願い、生きる事を望んだ。さっきまで死ぬ事を望んでいたのに怖くなかったのに、怖くなった。

何も出来ず、甘んじて受け入れるだけだった自分がこつも必死になつて、抗つて、そして、勝った。それが、

心残り、悔いになつた。

これが普段から、私生活で出来てたなら絶対に何かが変わっていった…変わったんだ、と。

「…っく、ひっく…っぐ、ぐすっ…うっ」

僕はそれを知って、涙を流した。
そして、

「っ…うっ…、あ…」

心の底から生を望みながら、

「っ…、っ」

僕は、

「っ…、…っ…」

意識を失った。

：

暗闇に沈む森の中にただ一点、宙に浮く小さな焰に照らされた部分が現れる。

焰はゆったりと一方向に進み、それについて行くようにして歩く二人の長身の女性が行く先を照らしている。

「なあ、」

しばらく無言で歩いていた二人だが、その内の片割れがやる気のなさそうな声で口を開いた。

「本当に、”膨大な魔力”を感じたのはこの先なのか？」

その言葉じりには胡散臭いと言いたげな含みが存分に加わっている。

「長が魔力を感知したのよ？ 疑う気？」

「別に疑ってるわけじゃないけどさー…あたし達ですら遠すぎて及ばない程なのに、その口から”膨大な魔力”って言われてもピンと来ないんだよねー」

それ相応以上の実力を身に付けていると自負があるのか、そのやる気の無さそうな女性からはそんな気配が窺い知れる。

それを歯牙にも掛けて貰えず、自分達にも感じられなかったパツと出の存在を感じ取ってはいきなり指示を出されたのが面白くないようだった。

「“成人の旅”から無事に帰ってきて少しは大人になったかと思ったのに…相変わらず、親離れ出来ないのね。貴女って妹はどうして、そう…」

「う、うるさいなあ」

やる気の無さそうな女性を妹と言う、もう一人の女性。

確かに見た目から年齢差を少し感じる程度だが、仕草から見ると確かに妹という女性と比べれば落ち着いているようにも見えた。

「母様…長にもう一度、旅に出させるもらうよう進言しようかしら」

「わっ、ね…姉様そ…ん？」

姉と呼んだその女性の言葉に何か言い募ろうとした所でやる気の無さそうだった女性が何かを感じとったのか、一気に表情が引き締める。

「…？ どうしたの？」

「血の臭いがする…しかも、人間のだ」

それを聞いた瞬間、その女性の表情が強張る。

「人間…？ まさか、“入口”でもない処から結界を破って入ってきたのっ？」

「判らないよ。とりあえず他に人間の臭いはしないから一人…そい

「つから他人の血の臭いはあんまり……何？ 変な臭いがする？」

「……急ぐわよ？ 案内して」

「あーい」

剣呑な雰囲気を書わせた姉は焔を消して歩を早めるが、それとは正反対に妹は先ほどとは打って変わった呑気な風で歩を早めると姉の横に並び、そのまま小走りすると少し先導し、森の闇へと消えた。

樹海は異世界への入り口（後書き）

□ 神楽 晃 かぐら こう

14 歳 / 150 c m / 38 k g

この物語の主人公。

柔らかくクセの無い黒髪とくるくと良く動く黒い瞳を持っており、丸みのある顔と相俟って初見の人には女の子と間違われる事もしばしば。

年齢の割に頭が良い。が、代わりにあまり身体の方は丈夫ではなく、しかも運動音痴。

性格は以前は明るかったのだが、過度のイジメにより内気になり、少し自虐癖を持ってしまっている。その為、自分に対しての好評価には懐疑的で何人かに本当にそうなのかを何度か訊かないと全くと言って良いほど、本気にはしない。

幕間1（前書き）

はい、2話目です！。

今回は、主人公を助けた二人が居る側のお話です。

むっちゃん説明文章満載なので諦めずに読んで下さると嬉しいです

（・ω・、）

幕間 1

…或る一室。

数人の女性達が木のテーブルを囲み、各々が目の前の果実酒の入ったグラスを傾けている。

女性達は見目麗しく、若さに溢れ、纏わせた衣は薄手で露出も多く、その瑞々しい肌を外気に晒している。

覗かせる肢体は傍目には長身瘦躯…だが、その体躯は表現に反して女性らしさの減り張りが随分とハッキリしており、皆が皆、その美貌と相俟って抜群の造形美を醸し出していた。

「…で、」

その内の一人、中でも最も威厳に満ちた女性が口を開き、

「例の人間の仔はまだ目を覚まさぬのか？」

誰にとなく問うた。

人間の仔…そう表現するように彼女達は確かに人ではある。が、人間とは明らかに異なっていた。

特徴として良く挙げられる”長身瘦躯”は人よりも高い部類に入り、違和感はあるがそれが決定的な違いではない。

決定的に違うのはその”長い耳”にある。

それはエルフと呼ばれる永い時を歩む長命な存在の証…なのだが、彼女達は更に異なる。

その違いは肌や髪の色。

彼女達の肌は通常のエルフとは異なる浅黒・小麦色や薄赤褐、浅青色。髪も金や青、緑と明るい色が多いエルフとは対照的に銀や灰色に近い銀、もしくは鈍く光る鉄色や赤銅、黒みがかった色などが色濃く沈んで重い光沢を放っていた。

彼女達はエルフという種族の中でも亜種となるダークエルフと呼ばれている存在に位置する。

あと、対外的にもほぼ例外なく温厚温和なエルフとは違い、ダークエルフは味方やエルフを含む同族に対しては基本的に温厚で取っ付きやすいのだが、敵と見做したモノや造形的に醜悪なモノに対しては苛烈極まりなく、容赦ないという側面も持っている。

「今日で丸二日経ちましたがその気配は全く無く…ですが、」

女性の言葉を受け、隣に座っていた見た目からこの中で比較的にも若く見える、表情に何処か幼さの残るダークエルフの女性…少女？ が口を開く。が、

「その間に傷は既に塞がり、顔色も…良くなっていますので、もしかしたらすぐにも目を覚ますかもしれません」

その声色には何処か、畏怖したモノが混じっていた。

助けた仔が目を覚ます。

死から救い出したなら、快方に向かうのなら喜ばしい事のはず…ならば、何故か？

「治癒魔法の一切を受け付けず、自前の自然治癒のみで今尚その身を治していると…一体、何者なのだ？」

また違うダークエルフの女性がした詰問は、少女が畏怖する理由の疑問を口にし、

「それと、その件の仔…黒髪黒瞳と聞いたが真か？」

それと共にまた異なる事柄も確認するように少女に訊いた。

「…はい。確かに、黒い髪と黒い瞳でした。間違いありません」

少女はそう言いつつ、己が目で見たにも関わらず、それでもまだ信じられないという風に首肯する。

この少女は森の中で仔を発見して怪我の具合を見て、このままでは保たないと判断して連れ帰ってきたという経緯がある。

実は、魔力の発生源へと向かった二人の内の片割れであり、あの時のやる気の無さそうにしていた方である。

そんな連れ向かった中で彼女は実際に仔の安否を確かめ、瞳孔確認まで行っていた。ならば何故、直に見たにも関わらず未だに信じられずにいるのか？

それは、

旅によって培われた先入観に拠るもの。

世界を回ったが完璧な黒髪を持つものは片手で数えられる程しか目にせず、ましてや黒い瞳などは旅の最中の100年…と言わず、最年長の長ですら誰一人として見たことがなかったのが理由だった。

「…髪に関しては染色で染めているのでは？」

その言葉に威厳を醸し出していた女性が、ふむ…と一瞬、考え、

「カルナ」

「は、はい」

少女…カルナを少し見やり、

「下の毛はどうだった？」

「はっ、はい………えっ、は、はっ！？」

真面目に応えようとしたカルナが言葉の意味を理解し、頬を染めるのを意地の悪い笑みを浮かべた。

「治療を試したのは確かおぬしかったろう？ その時に血で汚れた着せ物を変えたのもな………のう、我が末娘カルナよ？」

「わっ、わっあ、あああたしはっ！ あ、あたしは…えと」

見事、カルナは一気にしどろもどろにさせ、言葉に詰まってあたふたとするのを眺める、威厳から嗜虐へと換えた、長であり母でもある女性をチラチラと見やっつては視線を泳がせた。

「え、えと…えとっ…」

何故こうも言葉に詰まり、平静を保てない理由。

「う、うーっ…うーっ」

それは、カルナが成人の旅から帰ってきて間もないのだが、実に

100年とあったその道中で於いて一度もそんな場面に遭遇せず、果ては避け続けた結果、一連の経験を全くしなかったのが原因だった。

「まっこと…初心なままよなあ、カルナ」

「あうう…」

その長い耳の先端までも真っ赤にして俯くカルナを見やりながら、その母…クイアニス…スケイスは胸中で嘆息する。

エルフは生まれてから約15年までは人間と同じ早さで成長するのだが、それ以降は安定期に入る。

発育はゆつくりしたモノになり、そこからは永い年月を経、寿命が尽きるであろう時が近付くにつれ徐々に老いていく…それでも人間の十分の一以下の早さで。

成人の旅とは、成長期を終えて安定期に入った若者が100年の間、見識を広げる為に外の世界で旅をする儀式の事を指す。

これは重要な通過儀礼ではあるが、100年もの間を森の中しか知らない若い少年少女が外の世界で旅するのは確かに過酷なモノであり、困難を窮める旅となる。

かく言う、カルナ自身も旅の最中はずっと身の危険と隣り合わせであったし、生命の危機や性的な意味での危機も色々何十回とあった。が、持ち前の勘と感覚の鋭さで難を逃れてきて事なきを得て森に帰ってきたのだ…と言っても、

「えと、」

伊達に100年間、世界を旅した訳ではない。

そう言った経験は無いものの知識は十二分にはあるのだ。

精々、耳年増止まりなのは否めないが。

とりあえず、そうしてカルナは何か得ている知識らを総動員して鑑み、結論に結びつけてはいた。

要は、頭の髪を染めたからといって下まで染めるという徹底してやるバカというのはまず少ない…それに、

「う、うーん…」

カルナは実際に服は脱がせたが下着類はそのまま、”そこ”の確認などはしてなかったのもあった。

ただ、気を失っている姿しか見ていないが、気弱げな顔立ちや時折に見せる弛んだ寝顔はそんな暴挙をするような仔ではないと彼女は思っていた。

とりあえず、

「…そ、染めてはいない…で、しょう」

何とか声を振り絞ったカルナがそう答えた。すると、

「…っぶ、」

彼女の隣から吹き出す笑いが起こった。

「ぶっ、ぶ、つくあ、あはっあはははっ…カルナ、耳まで真っ赤…ほんと初心だよね」

「っな！？…っ、うっつ、うるさいなあっ！」

必死に考えてそう答えたカルナは批難するも、茶化されて思わず

俯いてしまう。

それを見た、傍らに座っていた女性はこれ幸いにと真っ赤になつて俯く彼女の耳をツンツンと突つつき始める…そんな彼女も、実は件の仔を連れ帰ったもう片方だったりするのだが。

「カルナちゃん可愛いー」

「う…う…う…う…」

カルナは最初こそ突つつかれるのを甘んじていたものの、次第にイライラし始め、遂には、

「っだあぁーっ！ そう言うシーア姉様だってっ、あたしと同じでそんな経験なんかないじゃんかーっ！」

キレた。

「っな？！」

カルナの反撃に耳を弄って遊んでいた女性…シーアは一気に取り乱し、絶句する。

「い、いいい今っ、今言うことじゃないでしょっ！？」

実際は藪蛇で因果応報。

そも、シーア自身それに付いてはかなり気にしていたせいもあつて思いの外に狼狽えてしまい、テンパったそのままで食ってかかってしまう。

「あたし悪くない！ 先に仕掛けたのはそっちだし！」

「良くないし関係なくないっ、だから許されないわ！」

「横・暴・だつ！」

「当・然・よつ！」

「なんでさつ！」

「何よつ！」

と言った感じで暫く言い合った後、そのまま戯れ合いに発展していくそんな姉妹二人を見ながら、

『…』

他のダークエルフの女性達はその意味がもたらす事態に改めて溜め息を漏らした。

成人の旅は、出会いの旅でもある。

外の世界を回るのは何も自分達だけではなく、同じく世界を回る他の森の同胞もそうなのだ。

そんな旅の中で同胞の異性と出会って行き、その中で気が合った者と行動を共にすれば、自ずと惹かれ合い、身を寄り添って子を成す事がある。

実際、意味合い的にはその割合が若干強い…では何故、溜め息を着くのか。

目の前の二人を含む、群れの歳若い女達が皆、そうだったのか？

エルフは元々から住み慣れた森を離れるのに抵抗を覚える気質であり、亜種である自分達も尚の事、他の森に点在する同朋達との相

互間は完全な不干渉を課している。

故に、成人の旅は重要な儀式なのである。

だが、いつからか外に出た妹達、娘達が何もないうちに成人の旅を終えて帰ってくる事が増え、いつしか仔を連れて戻って来た者など誰一人居なくなったのだ。

それもそう成ってからかなり久しく、それが現在にまで至っている。

その弊害は村の出産率を崩し、今ではもう、とある理由から幼子という年齢の女子は村には居なくなっていた。

「…カルナヤ」

「っ、え、は、何でしょうか母様ってあつ！？」

シーアと取っ組み合いに発展したカルナは急に呼ばれて思わずと言った風に返事をし、慌てて口を塞ぐ。

「…ちゃんと”長”と呼ぶようにといつも言っておろう？ 未だに親離れ出来ん末っ娘よな、カルナ」

クイアニスはそんな愛娘の様に微苦笑を浮かべ、見つめた。

「え、えと…」

「ふふっ…さて、そろそろ包帯を替える頃合いではないか？ カルナ」

「え、あつ…は、はい！」

「行きなさい」

「は、はい！ し、失礼します」

カルナは慌てて席を立つと周りの者に頭を下げながら部屋から退出する。

畏怖を感じたもののアレは、正体不明の仔ではあるが大怪我を負っていて目覚めていない。だから、それ以上に気を遣っているらしいのはその慌てぶりから自然と分かった。

「……」

そんなカルナにシーアは何も言わずに彼女を見送り、相手が居なくなつて手持ち無沙汰になっているのをクイアニスは暫し、眺め、

「……あれが生まれてすぐに父親が逝き、それと同時に……村最後の男達が立て続けに亡くなつてからもう100年余り、か」

徐にそう呟くクイアニス。

その言葉に聞いた者は皆、暗い面持ちになつていく。

シーアを除いた者は、長であるクイアニスと共に今居る森に移つてきた最古参とその生まれた第一子達で皆が皆、亡くなつた父親や最後の男性を想い、耽つていく。

村から男が居なくなつた理由。

自分達の種族は長命故か子を宿し難く、その上で種の優位性からか女兒を生む比率が高いのも原因だった。

割を食つた男児の出生率は極端に低い上に、寿命も女子と比べれ

ば短命で差としては5〜6倍の差がある。

所持魔力が高ければ高いだけ寿命は伸びるが、先の差から外れる程でもない。

「…今思えば、あの方法も正しかったのか分からん」

他に男子は女子と比べて成長すると身体的に恵まれる。

その所為か、好戦的で旅の途中での死亡率が高かったのもその一因だったのもあって、ここ最近は過保護に育て、成人の旅も出させずに森の中で一生を終えるという状態を続けていた。

その結果、自ずと近親者との交わりも増え、それが原因か、その悉くが女児しか生まれず、一応には最も遠縁となる長クイアニス自身も交わって何度か孕んだが、結局は女児しか授かれなかった。

「…こんな時、他の森との相互間が無いのが歯痒いな」

永年をそう過ごしてきた手前、他の森に対して今更、何かしらの遣いを出すのは二の足を踏んでしまう。

長としては遣いを出したい…だが、それよりも先にエルフとしての気質が邪魔をしてしまう。

そうは言ってられない現実があるというのに、そんな難儀な気質に彼女は顔を瞼を閉じてその柳眉を寄せていった。

「…長、もしかすると他にもこの状況なのでは？」

クイアニスは瞼を開き、疑問を口にした一人を見やった。

「…その根拠は？」

「シア」

「え、はっはい！」

話を振られ、シーアはカルナと戯れ合った時とは打って変わって神妙な表情で旅を振り返ってみた。

シーアは妹のカルナより早く7、8年も前に帰って来ており、この場に妹が居なくとも現状を推測するにはその程度の年数差は誤差の範囲内。

「…確かにわたしが旅をしていた頃にはもう、同族の異性は全く見た覚えはありません。根拠としては、恐らく高いかと」

結果は芳しくない…いや、もしかしたら最悪かもしれない。

カルナに限らず歳若い者、皆に訊いたとて変わらないだろう事実
に、やはり…と溜め息を漏らし合っていく。

「我らと同じく近親者との契りによって子を成している…とは考えたくはない。考えたくはない、のだがな」

クイアニスはそう呟いてから、それを否定するように頭を振る。

経験則から言ってそれはもう群れとしては末期状態…こちらみたく遣いを出すか出すまいかまでには至っていない前段階というだけの話かもしれない、とは思いたくなかった。

だが、

「余所もいずれはこうなるかもしれん、か…」

ただでさえ、暗かった部屋の雰囲気が一気に重たくなる。

そして、

「何度、口に出したかはもう分からんが…」

クイアニスはテーブルを囲む皆を見回し、

「異種族との契り、そろそろ考えねばならんかもしれん。皆も覚悟はしておいたほうがいい」

口にした”異種間との契り”だが、それを口にするのは本当に、今に始まった事ではない。

「それは…出来ませんっ」

「…そうは言うがな」

「皆が納得しませんっ」

この言葉は必ず、皆が口々に反論し始めてしまい場が混乱する。

「…ふう…」

自身もこうなるであろう事は初めから分かっていたし、割り切れない事も判っていた。

男が居なくなっただけからの100年で幾度と無く言葉を交わしてきたのだから。

とは言え、やはり種としての誇りが高いエルフには異種間など屈辱でしかない。

他にも理由は多々あるが、ダークエルフである自分達に於いては亜種だからこそ”個”としての誇りは高く、エルフの比ではないのだ。

「皆の言いたい事は重々承知の上だ」

「ですが…っ」

「だから…だから、もう止そう。この件はまた今度だ」

元に戻る、部屋の空気。

結局、その都度はその意識が先に立ち、その案を口にする事は有れども忽ちに有耶無耶に消えていく。

それが、この集まりの締めの方であった。

幕間1（後書き）

ダークエルフ…そう、

私はデイドリットよりもピロテース派だ！！（、・ω・、）

目蓋開けばそこは異世界（前書き）

何の間のと第3部分の投稿です。

ちまちまと頑張りますので宜しくお願いしますm┐┐m

目蓋開けばそこは異世界

「ん…う…?」

…良い匂いがする。

微睡みであやふやな意識の中で、僕は花の様な…果実、柑橘類の様な華やかな香りを嗅いだ。

さっきまで咽せちゃうくらい自分の血の匂いがいっぱいしてたのに、何で?

「えう………ん…、ん?　へ…うあわっ!？」

疑問に感じて目を覚ました瞬間、視界に入った見覚えのない風景に思わず声を上げてしまった。

「え?　えっ?　こっ、こ、ここ何処!?　あ、れ…痛っ!？」

急に襲ってきた頭痛で頭を抱えそうになった時、嚙んで出血していた腕に包帯が巻かれている事に気付く…そして、実際驚いたその痛みも実はそれ程でも無い事も。

うん何か、意外と冷静だ。

冷静ついでに意識を失う前後を思い出してみる。
確か、

「爪が割れてて、指も折れてたっぽい… んだけど」

それが添え木やら包帯やらで丁寧に治療してあって… って、あれ？

「…服… 変わっちゃってる？」

今更に僕は自分の姿を見下ろして啞然とした… って全然、着慣れた制服じゃないよ！？

「な、なんで… うんっ？」

少しザラついた布地は着慣れた感の無さがあって物凄く落ち着かない… 何て言うか、ヒドく簡易で凄く質素な服と言うか？

外国映画で良く見る中世の農夫のを見ているような感じのに近い。何か、ごわごわしてて着心地は悪いと言うか、堅い生地が肌に擦れるというか、

「うー…」

胸の先つちよとかが擦れて何か痛い… って、

「助けてもらって僕は何を… って、」

… あえ？ そうだ、何で生きてるの、僕？

「え？ 誰かが… 僕を助けてくれた… のかな？ でも誰？？」

森の中で満身創痍だった自分を助けてくれた上に手当までしてくれた存在に僕は他に誰も居ない部屋でうんうん唸ってる内、

「…生きてるんだ……僕」

次第に、

「良かった…死ななくて、良かった…っ」

今を生きている事に涙を流して喜びを、言葉を何度も、何度も口にし、そのまま生を噛み締めていった。

「う、ん……………わー」

暫くして何とか落ち着いた頃、余裕が出来てきた僕は周りを見回すのに流れた涙を拭き、晴れた視界で以て部屋を観察する。

「…全部、木だ」

そう、すべてが木による造りで今、僕が座るベッドの土台も木。この部屋には今までに感じた事がないくらいの木香り…檜や杉、松と言ったモノとはまた違ったのが薄く満ちている。

「ログ…ハウス？　みたいな家なのかな……あ」

と、感想なんかを呟いてると部屋の扉が開いたのに気付き、僕は誰が入って来るのかギョツと見…って、え？

「、　　？」

僕が入ってきた、その綺麗な女性のその容姿を見て絶句した…あ、綺麗な人が来たのにも絶句したけど、それよりもっと…で、あれ？ さっき何か喋ってくれたんだけど、言葉が解らない…イヤ、んな

んじやなくってっ、もつと驚くことあるしっ！

「って、うええええっ?!」

『!?!、っ? ? !?』

こちらの驚きの絶叫に向こうも…その、綺麗な顔を驚きで表現しつつ”長い耳”を手で押さえながら、全然聴いた事無い言葉で僕を非難するように何か怒鳴ってる。

いや、言葉解んないし！ いや、だからそれよりもっ、

「えっ? え、なんでっ?!」

目の前のその女性の容姿に僕は信じられない気持ちで一杯です！
だって、

「え、えるふ…エルフ? じゃないっ、ダークエルフっ?!」

記憶が確かなら僕が居た世界では架空の種族であるはずのエルフがって違っつ、ダークエルフの女性が今、僕の目の前に居るんだから。

「あ、え、えと…」

『? … ? 、 、 !?』

僕が戸惑っていると相手も戸惑い始めた模様…多分。

まあ理由は僕と同じで言葉が通じてないからだと思っ、思っんだけど…ど、どうしたらいいと思っ?

『、?』

「…え、えと」

『…』

「…」

沈黙…し、視線が僕に突き刺さってるっ！

え、えとお…あ、そだ！

「僕の名前は晃、神樂 晃」
かへい くら

とりあえず自己紹介してみる。

『？』

うん、通じてない！

ならばと身振り手振りとジェスチャーで以て、自己紹介を成立させようと試みた。

正しい肉体言語って言うのは、僕の世界でも外人相手にもちゃんと伝わるんだから例え異世界でも通用するはずっ！

「神樂…か・ぐ・ら」

とりあえず、自身を指差しながら自分の名前を何度も言ってみる。

「か・ぐ・ら」

『……』「ラ、？」

あ！

「…」・っ

さ、リピートアフターミー！

「かぐら、っっー！」

『…』 … 「コ、ウ？」 『』

わっ、名前言ってくれた！

「そう！ っっー！」

『…』 「コウ？」 『』

うんっ！

僕は嬉しくて嬉々として頷くとダークエルフのお姉さんは僕の名前を確認するように呼びながら小首を傾がせる。

… 何だろ？ 年上の人だし失礼かもだけど、この人何だか仕草が可愛いですよっ。

『…』 … 『』

「…っ」

そんな意思疎通が出来て喜んでいるとお姉さんは手を自分のむっ…
っん！ い、今、気付いたけどこの人の服装、スngoく際ど
いつ。そして、

大きいです！ 何処がとは言えません…言葉にするのが何だか恥

ずかしいですし。

でも、何でか僕の視線がそっちに行きそうでスゴく不思議…何で？
とりあえず、えと、服自体には厚手の革が所々に付いたモノっぱいんだけど、胸元だけが何でか大きく開いてて何も無くて下着の巻く布みたいのが見えてて…一応、防具だよね？ RPGとかで言うクロスアーマーとかなんだろうけど、防具なら心臓守んないとかそれってどうなの！？

『
』

…え、んん？

目のやり場に困っていると何か言葉を口にした。短かったし、多分だけど、お姉さんが自分の名前を言ってくれたんだろうけど僕には難しくて聞き取れなかった。

「ふ…え？」

『
』

そんな、はてな？ な僕に微苦笑を浮かべるとゆっくりとした口調で教えてくれた…んだけど、

『
、
…
』

…ん、む。

「ん、んとお…」

『
…
…
』
「力」
』

あう、一文字ずつになったあ。

「うつつ、えと……か、けあ…あ？ ……」
「力」？」

発音し難いつ舌嚙むよ！

『。、……………」
「ル」

一つ頷くと、また一文字。

「あ、え…う……………」
「ル」？ ”力”？」

『「カル」…。、……………」
「ナ」

「へう……………」
「ナ」？」

… ”かるな”？

「『「力”、”ル”… ”ナ”？』」

僕がそう、相手に確認するように見やるとお姉さんはニコッと笑って嬉しそうに頷いてくれた。

『「コウ」

… 『「カルナ”？』」

そして、一回ずつお互いに見つめながら正式に呼び合う。そうして、

「…あ、うつ」

改めて見るとやっぱり、

『?』

”カルナ”…さんは、スゴく綺麗で。

やっぱりエルフなんだなあとそんな感慨に耽つてると目が合つて
る事を思い出して慌てて逸らした。

背は多分、高くって…150ぐらいしかない僕では立って近くに
寄つたら、真上を見上げなきゃ顔が見れないなあと思つてみたり。

『「コウ？」』

呼ばれたので照れながらもチラリとカルナさんを見る。

浅黒でキレイな肌、灰色に近い銀色の柔らかそうな髪はポリユー
ムがあつて、耳に掛かるぐらいのショートで整えられていて、それ
がまたカルナさんに凄く似合っていた。

「っ……」

顔が真っ赤になるのを感じて再度、視線を逸らして俯いてると

『? 。、』

カルナさんがベッドに近付いて、僕の傍らに腰掛けてこちらへ向
いてきた…って、あ！

「?」

普通のスカートみたいなのと思っていたソレは実は前垂れで、腰からスリットが入っててっ、こちらに膝を向けてきた拍子に前垂れからカルナさんの小麦色にも似たそのふとも…って何言ってるんだろ僕っ？

「っ、な、何でもありません」

釘付けになりかけるのを避けて目を泳がせた時、ふと視界にカルナさんの手が包帯が巻かれた僕の足首を掴むのが見えた…掴んだ。

「ひっ」

足首を掴まれてた。

「あ、あ…あ…」

やんわりとした手つきなのにその瞬間、カルナさんの綺麗な手が

「あ、あ、あっあ」

『？」「ウ」

「いつああああっ！」

『っ！？』

あの化け物の手と重なった。

「あーっ！　っわあああっあーっあーっ！！　あああああーっ！！」

『！！？』

僕は叫びながらカルナさん突き飛ばすと一番離れたベッドの隅に身を縮こまり、

「っひ…いつ、いやっいやあっ」

片腕で頭を庇い、

「やつ、いつ…うつ、うつ」

もう片方で脚を抱え、

「っ、はっ、はっ…はっ、っぐ、う、うう…うーっうーっうーっ」

足首を庇いながら震え、心の底から怯えた。

『…「コウ？」』

…っ！

名を呼ばれ、僕が

「あ、…『か、るな』…さ、…あ、ああ…っ」

カルナさんに何をしたのかに気付いてハッとした。

「あ、あ、ああ…ご…ごめっ、ごめんな…さい、ごめんなさい！
僕…ぼく…」

謝る。が、言葉が通じない事を忘れて…バカっ、僕を助けてくれ

た恩人なのにつ僕はっ！

「さ…いてい、だ…最低だっ僕はあっ！」
「…」

突き飛ばすなんて何て事をつ。

「…っ、ぐ…う…ううっ」

やってはならない事をしてしまい、僕は涙が溢れてきて…泣いた。

「コウ…」

カルナさんが僕を呼んでる…けど、ヒドいことをしてしまったという負い目でカルナさんの方を見ることが出来ない。

「…っ、うっ、…ひっぐ」

「…」

気まずい沈黙と僕のすすり泣きが部屋の中を支配する中、カルナさんが動いた。

気配で静かにベッドに上がって僕が居る隅っこに来て…

「…、」「コウ」「」

「っ…」

頭を撫でてくれた。

手を翳された瞬間、僕はビクツとしちゃってカルナさんは少し迷

っただけどそのまま、僕の頭に置いてくれて優しく撫でてくれた。

『

。』

』

正直、カルナさんが何を言ったのかは解らない。でも、その手はすごく、

「『カルナ』、さん」

すごくあたたかかった。

手で庇うのを止めた僕は撫でてくれるカルナさんを見上げ、自然と目があう。

その瞳は、

『

』

殆ど忘れていたもの。

僕の事を真剣に案じる、心配げなモノ…だと分かった。

『

…

。』

』

泣くな…だから、泣くな。

言葉は解らないハズなのに何故か、続いた言葉の最後の部分だけはハッキリとカルナさんがそう言ったように思えた…だから、

「…お、おねがい、し…ます」

僕は包帯をした手や腕をカルナさんの方へ差し出し、表情でゴメンナサイって感情を込めた。

言葉が通じないからこんな方法では少し不安だったけど、

「」

カルナさんはちゃんと汲み取ってくれたみたいでニコツて微笑むと腕を取って包帯を変え始めてくれた。

手慣れた手付きで包帯が次々に新しいのに変えられていくのを見ながら、カルナさんの方を盗み見ては恥ずかしさからアワアワと部屋をあちこちを見回しに見回した。

「？」

「ふえっ？ い、痛くないよっ？」

何訊かれたかは解ないけど、とりあえず新しい包帯を巻かれた方の手を何度かグー・パーしたり、ブンブンしてみたりした。爪とか割れたからまだ痛いはずなんだけど、今はもう全然痛い。

「」

「？」

その時のカルナさんの表情が何か、何かを含んでたような気がして、僕は何だろな？ って見てただけけど、

「」

そしたらカルナさんはまたニコツと笑って包帯を変え始めてしまった。

んー…何て言うか、

「…何か違うなあ」

「？」

ダークエルフってゲームとか小説の中とかなら必ず敵役で出てくる、邪悪な存在ってなってるけどカルナさんを見た限りじゃそんな風には見れなくなってきた。

「…？」

考え事していると、いつの間にか包帯を換え終えたカルナさんがジツとこちらを見てたのに気付いて、軽く頭を下げた。

「…あり、がとう」

「？、。」

頭を下げる僕にカルナさんがまた何か言っただけでそのまま部屋を出ていったんだけど、すぐに部屋に戻ってきた。

「？、？」

その手にお盆を載せ、それを僕の横に置いてくれる。

「？え、わああ」

ベッドの上に置かれたお盆の上には見たことのない果物みたいなのが沢山あった。

野菜のスープみたいなのや…あと、意外だけど少量の調理してあ

る肉料理みたいなのもある…って、え…これってもしかして？

「僕が…食べていいの？」

指でお盆と自分を交互に指差しながらカルナさんを見やると彼女は又、ニコツと笑って頷いてくれた。

そうと解ると同時に僕のお腹が急に鳴ってしまい、カルナさんに聴かれてしまうという恥ずかしい目に遭った…あ、今カルナさんに笑われた。

「え、えと……………??」

何とか気を取り直そうと果物の一つを手にとってみただけど、この果物…見た目とは裏腹に皮が硬いようで食べ方が判らないという、どうやって食べるの？　と言う壁にぶち当たってしまった。

『

』

「あ…」

その果物を持ったまま硬直してしまった僕にカルナさんは微笑を浮かべ、僕の指を蒂の部分に両方の親指を入れるよう教えてくれた。

指は蒂の部分に難なく入り、案外スラスカなそこからグツと力を入れると簡単に割れて真っ赤な果肉が顔を出した。

「何か見た感じ…メロンみたい？　てうあ、甘っ?！」

何この有り得ない糖度と度肝を抜かれつつ、カルナさんに食べ方を教わりながら食べていく。

少し時間が掛かってカルナさんの食事は大丈夫なのかな？　て思ったけど途中から彼女も食べ始めたのでそれは杞憂だったみたい。

食べ方が判らないモノはカルナさんの食べ方を見真似て食べてみたけど全部が甘く、最初はびっくりしたけどこの甘さに慣れてしまふと果物は全部美味しく感じられて、お料理も美味しかった。

このお肉の料理は僕用だったらしく、カルナさんは手を付けていない…やはりエルフって肉類は食べないみたい。

「ん、う…」

「？　、

…

」

僕が目蓋をこすっているとお盆を下げようとしていたカルナさんが何かを言ってきたのでそつちを見ただけど結局、何を言わんとしてくれてるのが解らない。

「…っ」

あ、溜め息着かれちゃった。

「

」

どうしようも無い僕にカルナさんはベッドの掛け布団に手をやるとその中をポンポンと叩いた…あ、寝ろって事か。

「うー…言葉が通じないって不便だなあ」

「

…

、

」

ベッドの中に入り込む僕に又、何か言ってくれたんだけど全然解らない。

解らないから気にしてもいられないので今は寝て、身体を安静にさせる事を最優先にした。さっきの食事でお腹が満たされた満足感からすぐに微睡んでいく。

「…おやすみ、『カルナ』さん」

『、』『コウ』『』

おやすみの言葉。

言葉は通じなくても、この場面ではおやすみの挨拶をしたのが解った僕は少し満足しながら、すぐに深い眠りに就いた。
その日を境に、

『』『コウ。』『、』『』

カルナさんが毎日、僕の処に包帯を変えにきてくれ、会話は出来ないけど何度も話し掛けて聞き取って覚えた言葉でカルナさんに話を繰り返していき、その甲斐あって少しずつこの世界の言葉…エルフ語？ を覚え、

「『』あ、りが…とう』『』」

『そつ、あたり。コウ』『』

暫くしたらカルナさんの方から教えてもらえるようになり、そこから徐々に理解出来る単語が増え始め、

「えーと、『僕、自分…が、この包帯、取る』『』」

今では片言だけど何とか会話が出来るようになった。

『お？ 言葉、理解。 。 、自分で包帯を
取る？』

まだまだ虫食いで解んないのもあるけどね。

「『取る。取ったら、”古いの”…付ける』」

『は？ ”古い”？ ”古いの”ね、はい』

「え、ありゃ？」

カルナさんはいきなりニヤニヤしたかと思うと手に取っていた新しい包帯を今さっき取ったばかりの使った包帯に変えられてしまった。

どうやら言葉を間違えたようです…すみません調子乗ってましたっ。

「『ま、間違い。使うの、それ』」

『言葉は正しくー』

「わわ、えと…」

さっきのは”古い”か”使った”って単語を間違って覚えちゃって使ってしまったらしい。

…え、えとー

「あ、あー……？」

しまったあつ、ド忘れしたーっ！

『 ”古い” はこっち、こっちは ”

” 』

カルナさんは頭を抱え込んだ僕を見かねたのか二種類の包帯を持ちながら単語を教えてくれた… ”どうやら ”新しい” って単語はそれみたい。

「 …えと、 『 あた…らしい ” 』 」

『 そ。新しい、包帯…はい 』

「 『 あ、ありがとう……うん。 あたらしい、新しい…新しい包帯 』 」

手渡してもらった包帯を持ちながら何度も ”新しい” っていう単語を呟いた。

『 頑張つて、コウ。

いっぱい話そ 』

「 『 うん 』 」

記憶力は良いほうな僕はここ数日でこれぐらいの会話は出来るようになっていた。

まだまだ無理なトコもあるけど、何を言いたいのかは大体で察する事が出来るので会話も楽になってきている。あと、

「 『 カルナさん、僕、頑張る 』 」

こうして良く話してたのもあってこの頃にはカルナさんとかかなり打ち解けてて、僕の世界では悪者扱いだったダークエルフは実は良

い種族なんだなあ
と認識を改めるのにもそう、
時間なんか掛からな
かった。

目蓋開けばそこは異世界（後書き）

感想欄に一件だけ入っててちょっと嬉しい…嬉しいけど、感想の返信はしない方向なヒルトです。

段々とお定まりな文になってって、それがヒドく気になってしまつて…（・ω・）

また更新が何時になるのかは筆者もわかりませんが、今後とも宜しく願いますーm（ーー）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896i/>

異世界への扉

2010年10月8日16時12分発行